

# 近世初期の京都見物について

—— 仮名草子の分析を中心に ——

中島伸吾

## 〔抄録〕

近世初期の京都見物に関する研究例は少ない。これは、名所案内記や旅日記等の利用できる史料の少なさに起因するものと考えられる。小論では、これまで利用されることが少なかった仮名草子を史料として用いることにより、近世初期の京都見物の様相を明らかにする。

具体的には、仮名草子の中から『竹斎』と『露殿物語』をとりあげ、そこに表れる京都見物の行動を分析し、それぞれの持つ特徴を明確にする。また、両作品の記述内容から、仮名草子を史料として利用することの妥当性について検証を行う他、京都見物の

利便性に繋がったであろうしるべや案内人についても若干の考察を行う。

それらの結果、『竹斎』がいわゆる「膝栗毛もの」の、『露殿物語』がいわゆる「評判記もの」の祖形となっただけではなく、万治・寛文年間の『京童』や『洛陽名所集』をはじめとする、いわゆる名所案内記類に影響を与えた可能性について指摘する。

**キーワード** 京都見物、京内参り、仮名草子、名所案内記、近世

初期

## はじめに

小論では、仮名草子の記述内容を分析することにより、近世初期の京都見物の様相を明らかにする。これまでの京都見物に関する研究は、名所案内記や旅日記を史料として用いるものであったため、これらの

史料が出現する万治・寛文年間以降についてのものがほとんどであり、近世初期の京都見物の様相については十分に研究されているとは言えない。しかし、これまで十分に利用されてこなかった仮名草子を史料として用いることにより、近世初期の京都見物の様相を明らかにできるものと考ええる。

近世は旅の時代と言われるほど、旅行が盛んな時代であった。特に民衆が社会的・経済的に上昇したことに伴い、一般庶民までも旅に出る時代であった。その背景には、元和偃武により社会的な安定が実現したことや、江戸幕府の諸街道整備による交通の円滑化があるとされる<sup>1)</sup>。しかし、封建的身分制度が強固な社会において、自由に旅に出ることはもちろんかなうものではなく、様々な制約を乗り越えて実現するのが庶民にとつての旅であった。このため、遠方への旅は比較的許可を得やすかった寺社参詣に仮託して行われることになり、自然とその目的地が伊勢神宮や京都にある本山とされることが多かった。庶民は寺社参詣に仮託して旅行の機会を存分に楽しむべく、表向きの目的地はもちろんのこと、そこまでの道中や、表向きの目的地の参詣を成就した後にもさらに足を伸ばして、様々な遊山を行ったのである。

寺社参詣史については、新城常三氏が『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』(塙書房、一九八二年)において、数多くの史料に基づき通史的にまた総合的に明らかにして以来、歴史学だけではなく宗教学や地理学、民俗学、文化人類学など多様な分野からの研究が進んでおり、その研究史は、原淳一郎氏の『近世寺社参詣の研究』(思文閣出版、二〇〇七年)に詳しくまとめられている。また、本論が対象とする京都見物については、守屋毅・赤井達郎『町人の生活文化』(京都市編『京都の歴史』第五巻、学芸書林、一九七二年)や藤井学・森谷剋久『名所と本山』(京都市編『京都の歴史』第六巻、学芸書林、一九七三年)以来、様々な視角からの研究が蓄積されている。

名所案内記を使用して、京都の都市文化を論じたものとして、川嶋

將生氏の『京見物・寺詣で』(『京の歴史と文化』五、講談社、一九九四年、のち『洛中洛外』の社会史) 思文閣出版、一九九九年)と鎌田道隆氏の『近世京都の観光都市化論』(『奈良史学』一六、一九九八年、のち『近世京都の都市と民衆』思文閣出版、二〇〇〇年)が挙げられる。さらに近年では、林宏俊氏の『近世京都における名所観と寺院―名所案内記の分析から―』(『奈良大学大学院研究年報』一四、奈良大学大学院、二〇〇九年)がある。

一方で、同じく名所案内記を使用したものであるが、京都見物の地理的・空間的分析を論じたものとして、山近博義氏の『近世名所案内記類の特性に関する覚書―「京都もの」を中心に―』(『地理学報』三四、大阪教育大学地理学教室、一九九九年)と『「京都もの」小型案内記にみられる実用性』(『地図と歴史空間―足利健亮先生追悼論文集―、大明堂、二〇〇〇年)や菅井聡子氏の『江戸時代京都の名所案内記と遊歩空間―類型化と編纂史の分析を通して―』(『地域と環境』二、京都大学大学院人間・環境学研究科「地域と環境」研究会、一九九九年)と『近世京都の名所案内記の順路設定にみる「洛中」「洛外」認識』(『日本建築学会計画系論文集』五七九、日本建築学会、二〇〇四年)が挙げられる。さらに近年では、金廷恩氏の『近世案内記における観光モデルコースの登場』(『日本研究』四一、人間文化研究機構国際日本文化研究センター、二〇一〇年)がある。

また、旅日記を使用して旅行者の京都における行動の復元を試みたものとして、村井康彦氏の『筆者不詳『千種日記』』(『京の歴史と文化』五、講談社、一九九四年)や高橋陽一氏の『多様化する近世の旅

―道中記にみる東北人の上方旅行―』（『歴史』九七、東北史学会、二〇〇一年）が挙げられる。さらに近年では、廣瀬優也氏の『旅日記からみた近世の京都参観』（『愛大史学 日本史・アジア史・地理学』一六、愛知大学文学部史学科、二〇〇七年）がある。また、国文学方面からは、板坂耀子氏が『江戸の紀行文』（中央公論新社、二〇一一年）等において紀行文作者の京都における行動について触れたものがある。名所案内記をその分析対象とすることから、これらはいずれも明暦四年（一六五八）の『京童』の刊行以降について論じたものである。

また、旅日記に基づいて論じられる場合も、『所歴日記』や『筑紫帯』の寛文年間（一六六一―一六七三）以降についての議論となっている。従って、江戸時代の最初期の約五〇年間の京都見物を論じたものはほとんどない。前述の守屋毅・赤井達郎「町人の生活文化」が、仮名草子である『犬枕』や『恨の介』、『竹斎』を引用してこの時期の京都において物見遊山が定着しつつある様子や仮名草子の持つ名所記的側面を指摘しているのが、数少ない貴重な研究例である。しかし、仮名草子そのものの史料性には言及しておらず、また京都見物という具体的な行動についての分析を欠いていることから、この時期の京都見物を明らかにするためには更なる研究が必要と考えられる。

小論では、仮名草子の中でも初期の作品の中で京都見物が行われている『竹斎』と『露殿物語』取り上げて考察していく。なお、これら二作品は小説や物語の類であり、いわゆる歴史史料ではない。従って、その内容から歴史的事実を導き出すわけではなく、後に詳しく述べるように、ある程度現実在即した記述が行われていることから、あくま

でも小説・物語ということは踏まえた上で利用することにより、その小説・物語に一定程度反映されているであろう当時の人々の生活様式や行動パターンを読み取ることが可能であることから、一定の史料価値を有するものであると考えるものである。

また、近世の旅については、信仰に基づく参詣や巡礼の旅であるのか、遊山的な旅であるのかを問題とする場合があるが、小論では旅人が京都において、寺社や名所、旧跡を訪れる行動を京都見物と総称する。これは近世の京都の名所の多くが寺社と重なるためである。

## 第一章 京都見物の史料

### 第一節 日記史料にみる京都見物

江戸時代初期の史料で一般庶民の行動や生活を記録したものは少なく、このためいわゆる上層階級の人々の日記程度でしか京都見物を確認することができない。その中でも、『舜旧記』と『隔冥記』に着目してみたい。『舜旧記』は、豊國神社の社僧であった梵舜の日記である。以下に『舜旧記』の中から京都見物に関する記述を引用する。

慶長二十年（一六一五）五月

廿七日癸酉、天晴、

姫君様為御見物、清水・祇園・三十三間・大佛已下御覧之由也、豊國へモ可有御参詣ヲ大坂之穢中御憚之由仰ニテ無御社参也、予在所ニ令滞留、俄急罷帰也、次玄蕃屋敷長老越前ヨリ上洛之由トテ来、扇五本持来也、次夜入大雨降、

『舜旧記』第四（史料編纂第二期）続群書類従完成会）

ここで注目したいのは、「姫君様」すなわち豊臣秀頼の妻である千姫の行動に関する表現である。豊国社については、「御参詣」や「御社参」という言葉を使用しているにもかかわらず、それ以外については「清水・祇園・三十三間・大佛已下御覧」とあるように「御見物」としている。ここで「御見物」とされている対象には、いずれも「御参詣」や「御社参」という言葉を使用しても問題はない。『舜旧記』は、豊国神社の社僧であった梵舜の日記であることから、豊国社の優位性を暗に主張しているとも考えられる。しかし、信仰のためではなく単なる「見物」であったことから「御参詣」や「御社参」ではなく「御見物」という言葉が使用されたと考えれば、千姫の行動を京都見物とみることができるのである。

一方の『隔冥記』は、金閣寺と通称される鹿苑寺の住職であった鳳林承章の日記である。『隔冥記』の中から京都見物に関する記述を引用する。

正保四年（一六四七）三月

十八日、晴天。夜明、而於宿坊、有振舞。（中略）帰路之次、慈濟翁與予令同道、赴不

二庵之湘雪沅西堂也。沅西堂今日自肥陽、上着也。予・彦蔵主・厚蔵主・壽眞赴于豊國、而見花也。自昨日、辨當之事申付。依然、平兵衛辨當持来、於豊國回廊下、喫辨當、喫濃茶、移刻、

遊興也。予亦徒步、而令同道、到五條通、日蓮衆之常樂寺見物。從其、御影堂見物。予始御影堂見物也。予以肩輿、直令帰山也。（後略）

『隔冥記』第二、鹿苑寺）

この記事には、鳳林承章が豊国社へ花見に行き、回廊の下で弁当を食べ、茶之湯を楽しんだ後に移動して常樂寺や御影堂を見物したことが記されている。前述の『舜旧記』と同じく、「見物」したものであり「参詣」や「社参」という言葉は使用されていない。豊国社へは、花見という明らかに遊興のための訪問であったためであろうか。

『隔冥記』にはこの他にも、「青龍寺之櫻・山崎寶寺方丈」（正保三年三月五日）や「法輪寺五大佛」（慶安二年四月廿二日）、「御室仁和寺」（慶安三年十月八日）、「本國寺」（寛文五年十一月六日）など、いくつもの寺社を見物した記述を見ることができる。禅宗の僧侶であり有力寺院の住職であった鳳林承章の日記であることから、かなり身分の高い階層の行動でしかないことは確かであるが、前述の『舜旧記』とあわせて考えても、「参詣」ではなく「見物」という言葉が広く用いられていた様子を知ることができる。

## 第二節 仮名草子の名称

近世初期に日記を書き残しているのは上層階級に限られるため、上層階級以外の人々の京都見物の様子が判明する史料はない。近世初期の上層階級以外の人々の京都見物を考えるために、小説ではあるが仮名草子を取りあげる。

仮名草子とは、文学史的には、「室町時代の御伽草子のあとをうけて、西鶴の浮世草子にいたるまでの江戸時代初期約八〇年の間に著作・刊行された物語・草子類をさす<sup>(3)</sup>」とされる。具体的には、関ヶ原の役の慶長五年（一六〇〇）から、西鶴の『好色一代男』が刊行された天和二年（一六八二）までの約八〇年間に刊行されたものということになる。

仮名草子は、仮名本位のやさしい読物の意であり、文中の漢字には振り仮名がつけてあったことから生じた呼称である。記述内容ではなく、形式に基づく呼称であるため、内容は種々雑多であり、その明確な分類は困難である。当初は写本として読まれていたが、慶長期には活字印刷本が登場していたとされ、その後寛永期には、整版印刷本が主流となって定着していったという。

### 第三節 仮名草子の読者

仮名草子は、文字によって著された作品であるため、当然ながら文字を読むことができる人でなければ、それを読むことはできず、参考にするにしても限られた階層、すなわち公家や上級武士等の上層階級に限られるのではないかという見方もあるであろう。しかし、仮名草子の読者はまだ十分な教養を身につけていない一般武士や庶民であったとされるのは、この当時からすでにかなりの人が文字を読むことができたからではないかと考えられる。

筆子塚の調査から江戸時代の寺子屋の師匠の数は、「十九世紀に入ると急増し、師匠の身分や職分も多様化する<sup>(4)</sup>」という。しかし、現在

まで残されている筆子塚は、筆子塚が建立されるという慣習の伝播の仕方にも影響されようし、このことが十七世紀に庶民に文字を教える師匠が存在しなかったということにはならない。江戸時代の初期については十分な史料がなく、広範囲の人が仮名草子を読むことができたとは言えないが、いくつかその傍証がある。

第一に、江戸時代の年貢徴収制度の一つである村請制においては、領主など支配階層からの指示・伝達はすべて文書により行われた。このため支配階層である武士については下級武士まで、また村役人についても村方三役程度までは読み書きができなければ成立しない行政形態であったことである。第二に商人には読み書き算盤の技能が欠くべからざるものであったことがあげられる。商いを行うには、それほど高度なものではないにしても、文字が読み書きできることと計算能力が必要であった。第三に慶長一九年の成立とされる三浦浄心の『慶長見聞集』巻之四に、

童子あまねく手習うこと

聞しは昔、鎌倉の公方持氏公御他界より東國亂、貳拾四五年以前迄諸國におゐて弓矢をとり治世ならず。是によりて其時代の人達は手ならふ事やすからず。故に物書人はまれにありて、かゝぬ人多かりしに、今は國治り天下太平なれば、高きもいやしきも皆物を書きたまへり。

尤、筆道は是諸學のもとゝいへるなれば、誰か此道を學ざらんや。（後略）



『日本庶民生活史料集成』第八卷見聞記、三一書房』

という記述があり、江戸の話ではあるが、かなりはやい時期から、広範囲の人々が読み書きの学習をしていたことを記録の上からもうかがうことができる。また、江戸時代前期の儒学者で兵学者としても知られる山鹿素行が寛文三年から五年(一六六三―六五)にかけてその門人に自らの講話に基づき編集させた『山鹿語類』巻七の君道七治教にある「○設學校立道學」の項目に

學校と云はあらざれども、在々所々に寺社多く、一里一郷の處にも神社佛閣のまふけなきはあらず、そのところの民人の小弟必相集りて手習物を學び、(中略)子弟皆手習物まなぶといへども、教ゆるもの學の道を知らざるゆへに、唯往来文をいとなみ日記帳のたよりとのみなりて、世教治道の助となり風俗を正す基となることなし

『山鹿語類』、國書刊行会』

とあり、寛文年間のことではあるが、村々にあつた寺社において往来物の手習いが広く教授されていた様子を知ることができることも、広範囲の人々が読み書きの学習をしていたことを示す記録の一つと考えられる。

これらのことから、仮名草子についてもかなり広範囲の人々が読んでいたということが想定される。特に、この後取り上げる『竹斎』は滑稽ものの娯楽作品として多くの人々に受け入れられたことから、何

度も刊行されたのであろう。

## 第二章 『竹斎』の京都見物

### 第一節 『竹斎』の作品と史料性

『竹斎』には、元和七年(一六二二)から九年(一六二三)までの間の刊行とされる古活字本二種(十行本・十一行本)と、元和七年(一六二二)頃とされる『竹斎東下』という写本、および寛永三年(一六二六)から十二年(一六三五)頃の刊行とされる寛永整版の他整版本が数種ある。しかし、小論で考察する京都見物の部分については大きな異同は見られなかったため、最も広く流布したであろう整版本の中でも最初期のものである寛永整版を取り上げる。

作者は医師であつた磯田道治で、「さる貴人の希望により述作した御伽用の草子」とされる<sup>⑥</sup>。しかし、仮名草子の読者層に娯楽作品として受け入れられた結果版を重ねたものであろう。

ここで、『竹斎』の記述内容から京都見物の史料として使用することの妥当性を検証しておく。第一に、豊国社と大仏殿に関する記述を見てみる。

豊國大明神に参りて、そもく當社大明神は、先の関白秀吉公の御靈跡なり。今時移り世變じて、社頭大破に及べり。

幾世とも栄へもやらで豊國の古き宮井は神さびにけり  
大佛殿を伏し拝み、一首連ねけり。

ゆゝしげに顔をば見せて秀頼の役には立たぬ大佛かな

『假名草子集』（日本古典文学大系九〇）岩波書店」

豊国社は慶長三年（一五九八）に造営が開始されている。大仏殿は慶長一四年（一六〇九）から豊臣秀頼により再建が開始され、慶長一七年（一六二二）には完成している。そして、その二年後慶長一九年（一六一四）にはいわゆる大仏鐘銘事件が起こり大坂冬の陣そして翌年の大坂夏の陣で豊臣家が滅亡し、元和偃武が布告され、豊国社の破却が開始されるのである。

『竹斎』では、豊国社について「社頭大破に及べり」と表現する一方で、大仏殿については「大佛殿を伏し拝み」と特段の説明をしていない。これは、豊国社は廃れているが大仏殿は比較的建立時点の姿を残していたとも考えられ、時間の経過とともに荒廃した様子を現実に取材して記述している可能性がある。

次に誠心院について「此處なん和泉式部が跡なりとて、石の印あり。」という部分である。「石の印」は見物対象を標示するもの、もしくは見物対象を標示しかつその見物対象に関する情報を提供するものであり、見物する人々にとっては重要な情報源の一つである。従って、近世初期に既に見物対象に関する情報を提供することにより京都を見物する人々にとつての利便性を確保するという行為が行われていたことの証左とも考えられる。

## 第二節 『竹斎』の京都見物の行動

『竹斎』は、京都の藪医者竹斎が京都での生活に希望を失って、郎

等のにらみの介とともに諸国廻りをするにこなし、都の見納めにと京都見物を行い東海道を下り、途中名古屋でしばらく住み、さらに東海道を江戸まで下り江戸見物をするまでの物語である。『竹斎』では京都見物のことを「京内参り」と表現している。

先ず、京内参りを仕らんとて、三條大橋うち渡りて、祇園林に差し掛り、先ず清水へ参りつゝ、鰯口でうど打ち鳴し、（後略）

『假名草子集』（日本古典文学大系九〇）岩波書店」

『竹斎』における「京内参り」は、まさに京都見物のことである。「京内参り」という語句そのものは、この『竹斎』で初めて登場したものではなく、狂言の作品において既に用いられている例がある。例えば『二千石』において、主人の許可を得ずにどこかへ行っていた下人（太郎冠者）が帰宅したのを聞き、主人が折檻を加えようと太郎冠者の家を訪問したときの太郎冠者の言い訳である。

（太郎冠者） されば其事で御座る。一人召仕はるゝ太郎くはじやの事で御ざれば、御暇の儀を申し上たりと、迎も被下まいと存、忍ふで京内参りを致しまして御ざる。ム、京内まいりをすれば、主にいとまをこはぬ法ですか。

（太郎冠者） ハア。

（シテ） 憎いやつの。是はいかな事。さんざんにせつかんを

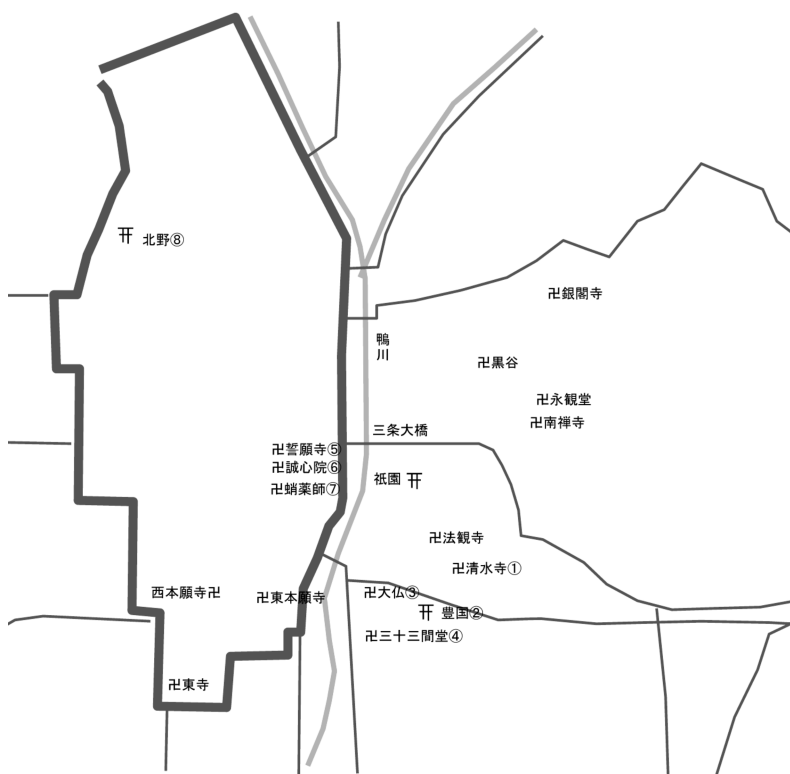
くわへうと存て御ざれば、京内参り致たと申。都の様子も承り度う御ざるに依て、先此度はさし免うと存る。

『能狂言（上）』、岩波書店

と、京内参りを無断欠勤の言い訳として使い、主人の方も都の様子を聞かせることと引き換えに許してしまうのである。ここでの京内参りとは、信仰に基づくものではなく遊山としての京都見物を指すものと考えるべきであろう。京都見物であるからこそ主人も「都の様子も承り度う御ざるに依て」許したと考えられる。すなわち、遊山としての京都見物が中世まで遡り得るとも考えられるのである。

### 第三節 『竹斎』の京都見物の特徴

『竹斎』の京内参りは、三条大橋を起点として清水寺・豊国社・大仏殿・三十三間堂と見物した後、寺町通を三条から南下し誓願寺・誠心院・蛸薬師と見物し、最後に北野まで足を伸ばしている。(図二)主人公である藪医者竹斎が、京都で暮らしていた人物という設定であることから、京内参りの見物対象は自ら選定していると考えられる。しかし、三十三間堂の後に寺町通を三条から南下している点は疑問である。三十三間堂からならば、寺町通を蛸薬師・誠心院・誓願寺と北上する方が自然であるにもかかわらず、南下しており、その後北野へ行くために寺町通を引き返しているのである。『竹斎』の記述内容のみではその理由は明確ではないが、三条大橋を起点とする二つの見物を組み合わせた結果と考えることもできるであろう。東海道の起終点



[圖一]

である三条大橋付近は宿が集まっている場所であり、東山の見物と洛中の見物それぞれの結節点ともなり得るのである。

また、歡樂地の見物先として伝統的な北野を選択していることも特徴である。三条大橋を出発し、清水寺から蛸薬師までは、参拝する様子を狂歌とともに記述しているが、北野については連歌や蹴鞠・能等



遊興の場として描写されているのである。すなわち、近世初期の京都見物は、寺社・旧跡だけを巡るものではなく、北野等の歓楽地において、都の繁華な様子を見物することをも含んでいたと解釈すべきであろう。

### 第三章 『露殿物語』の京都見物

#### 第一節 『露殿物語』の作品と史料性

『露殿物語』は「内容も朝顔の露の介という武家の美少年の恋物語で、愛慾になやんだあげく出家するという、煩惱即菩提の中世的恋愛観を一步も出ていない。」と評される作品である。作者は不明であるが、いくつかの理由から「おそらく京都の公家か、公家に近侍した人物であろう」とされている。作品の成立については、元和八、九年（一六二二、二三）ごろの事件を扱ったものと見られることから、寛永元年（一六二四）頃とされる。<sup>9</sup> また、上・中・下三巻の卷子本に仕立てられている。

同様に『露殿物語』の記述内容から京都見物の史料として使用することの妥当性について検証する。第一に傾城町に関する記述である。

東寺・西寺、四塚まで残らず一見し給ふ。かくて、「日もはやくれぬ」といふ声に、六条三筋町を帰らせ給ふに、十五、十六、十七八、廿ばかりの女房の、いくらといふ数を知らず、床机に腰を掛けて並み給へば、露殿御覧じて、これはいかなるところぞや、いにしへ玄宗皇帝の寵愛ありし三千の妃もかくぞと知られける。

吉野・初瀬の花盛りを今見る心地ぞせられける。（中略）

露殿は帰さをうち忘れ、ながめとれておはしければ、主、「いつまでかうでおはすべき」とて、ともなひ宿に帰りけり。

『仮名草子集 浮世草子集』（日本古典文学全集三七）小学館

『露殿物語』の記述内容からは、「六条三筋町」に傾城町が存在していることがわかる。実際に、天正十七年（一五八九）に二条柳町にあった傾城町は、慶長七年（一六〇二）に六条三筋町に移転し、さらに寛永十七年（一六四〇）に島原に移転している。『露殿物語』の成立年代と合わせて考えると傾城町が存在していた場所を正確に作品内容に反映させていると言うことができる。すなわち、作品の製作にあたっては、現実取材している可能性が十分に考えられるのである。

第二に、露殿一行が「五条あたりにて宿を借り」ていることである。時代は下るが貞享二年（一六八五）の『京羽二重』に、「順禮宿」として

柳ばゝたこやくし上ル町	扇や	正七
六角通東洞院ノ角	餅や	惣左衛門
右同北かど	伏見や	太右衛門
六角通ほねや町	ぬいものや	

『新修京都叢書』第二巻、臨川書店』と、西国順礼の札所付近の宿が記載されているが、中世以来の伝統がある巡礼者のための宿とは別に、この頃既に「五条あたり」に旅行者

が宿泊できる宿が存在していたと考えられることである。これは、同じく『京羽二重』の六條坊門通の項に、「此通諸職諸商」の一つとして「旅籠や」<sup>10</sup>があげられていることも傍証となろう。また、これも時代は下るが、元禄七年（一六九四）頃に編纂されたと推測されている『京都役所方覚書』の中巻に「四十九 京都茶屋有之場所、同茶屋数 并旅籠屋数」の項目に

旅籠屋数

一六十六軒	三条
一三十四軒	五条
一廿三軒	御幸町三条上ル町
一廿軒	御幸町三条下ル町
一九軒	姉小路寺町西へ入町
一十六軒	六角堂前
一廿軒	多クハ順礼宿致し候由
六角通骨屋町	
百八拾八軒	

『京都町触集成』別卷一、岩波書店

とあることも考え合わせると、三条通付近と順礼宿が集まる六角堂付近以外に五条通付近に多くの宿が存在することも、寛永年間にすでにじまっていたと考えられるのである。従って、『露殿物語』が近世初期の京都の宿の分布における史料たり得ることを指摘できるのであ

る。

第三に、京都見物にあたり「宿の主を呼び出だし」て「案内して給はれ」と言っている部分である。しかも宿の主はこれを受けて、「いとやすき御事なり。さらば御出候へ」と請け合っている。京都見物の案内の依頼を受けてすぐさま対応できるということは、普段からその準備があると考えることができる。すなわち、京都見物の案内を宿の主人が請け負うことは、この当時既に珍しいことではなかったということができるのでないだろうか。従って、京都見物のために上洛した人々のための案内人という役割が近世初期から存在しており、万治以降の旅日記によく見られる職業的案内人の萌芽と考えることもできるのである。

第二節 『露殿物語』の京都見物の行動

『露殿物語』の主人公朝顔の露の介は、江戸に住む身分の高い少年である。露の介が見そめた吉原の太夫が廓から逃げ出したことを聞き、その女を訪ねて上京した部分で次のように京都見物を行っている。

（前略）日野岡峠、栗田口通り過ぎ、花の都に着き給ふ。露殿御内の者を近づけて、「いづ方にてもしかるべき所にて宿とり候へ」と仰せければ、「承り候」とて、あなたこなたとかけ廻り、五条あたりにて宿を借り、露殿をこそ移し申しけれ。

『仮名草子集 浮世草子集』（日本古典文学全集三七）小学館

と京都の宿に到着したところで中巻が終わっている。そして下巻の冒頭で、

かくて露殿、一日二日と過ぎ行きて、旅の疲れもやみければ、宿の主を呼び出だし、「我はじめて都へのぼりたる者なれば、洛陽の靈仏霊社、残りなく見物せんと思ふなり。案内して給はれ」と仰せければ、主このよし承り、「いとやすき御事なり。さらば御出候へ」とて、まず祇園の社へともなひ行くに、四条河原を通らせ給へば、ここかしこに棧敷・鼠戸をかまへ、その家々の幕を張り、寄太鼓を打ち鳴らしけるほどに、露殿寄りて額を見給へば、「来たる十五日よりこの内において、観世能御座候。太夫は吉野・対馬・土佐・定家・尾上・高島、いづれも名人達なり。御望みの方々は御見物あれ」とぞ書いたりける。また一方には佐渡島歌舞伎と書くもあり、また「この内において、能操り御座候。太夫は河内守」と書くもあり。左内淨瑠璃と書くもあり、山豚という生物もあり。さまざまのていたらく、まことに花の都ぞと、露殿興をぞ榮されける。

それより祇園の御前にまゐり、ふし拌み給ひて、南の門へ出で給へば、縁の両方に茶屋とおぼしくて、三十四五の女房の、赤前垂をたれ下げて、「御休み候へ、御壁もあたたかに候ぞ。この祇園豆腐と申すは、鬼界。高麗・契丹国・蝦夷が島の果てまでも、その隠れまします。この豆腐を喰ふ人は、わが氏子ならずともまもるべしと、天王の御誓ひにて候ぞ」と、袂にすがりとどむれ

ば、さすが岩木にあらざれば、心弱くも立ち帰る、所は祇園の茶屋豆腐、何かは苦しかるべき。

それより八坂にさしかかり、清水にまゐり給へば、(後略)

『『仮名草子集 浮世草子集』(日本古典文学全集三七) 小学館』  
ここで注目したいのは、主人公露の介が、「洛陽の靈仏霊社、残りなく見物せんと思ふなり。」と言っている部分である。これは特定の宗教、宗派、信仰に基づいて寺社参詣を行いたいということではなく、靈仏霊社即ち有名な寺社を残りなく見物したいという意味の表明であると考えるべきである。従って、寺社を名所や旧跡と同じレベルで捉えているということもできる。だからこそ参詣せんではなく、「見物せん」と言っているのであろう。ここに、信仰に基づく寺社参詣ではなく京都見物を見ることができるのである。

### 第三節 『露殿物語』の京都見物の特徴

『露殿物語』における京都見物を図にしたものが図二である。『露殿物語』の京都見物は、清水寺の参詣の様子の描写等から『竹斎』の京内参りを踏まえていると考えられる。

#### 『竹斎』

先ず清水へ参りつゝ、鰐口でうど打ち鳴し、「南無や大慈大悲の観世音、さしも草さしも畏き誓ひの末違へ給はずは、我等を守らせ給へや。千手の御誓ひには枯れたる木にも花咲くと承れば、此



りを踏まえていることから、京都見物という行動では同じではあるが、新興歓楽地を描くという独自の主題が反映された結果、四条河原や祇園の豆腐売り、そして六条三筋町の様子を描くという特徴を持つに至ったと考えられるのである。

## おわりに

『竹斎』と『露殿物語』はほぼ同時期に成立したと考えられる仮名草子の作品であるが、第二章並びに第三章でみてきた内容と比較することにより、京都見物における特徴を確認できる。例えば、『竹斎』は主人公が都を離れるにあたって見納めに京内参りをした後に東海道を下る構成となっているのに対して、『露殿物語』では、主人公が江戸から東海道を上り初めて上洛したものととして京都見物を行っている。また、『竹斎』では、主人公が都の住人であったため、自ら京内参りの対象を選択していると考えられるが、『露殿物語』では宿の主人に案内を頼んでいる。いずれも都の住人の立場から見納めに見物するべきものと、上洛した人物が見物するのに値する寺社が提示されていると考えるべきであろう。『竹斎』・『露殿物語』はともにその記述内容から、作者が京都に住む医師や公家か公家に近侍した人物とされており、京都や京都見物に関する知識を十分に有していたと考えられる。また、現実取材している可能性も十分に推測できる。

これら二作品の読者にとっては、仮名草子が京都見物のための有益な情報であったと考えられる。『京童』の刊行を境として次第に京都見物のための情報が充実していき、やがて刊行された情報によって京

都見物が容易になっていくのであるが、未だいわゆる名所案内記類が刊行されていなかった時期に、京都見物を計画するにあたって、必要な情報を得るために仮名草子を利用されたことも想定できる。いくつかの仮名草子を読み比べることにより、それらの主人公が見物してまわる先を自らの見物先立案の参考とすることができたため、いわば、京都見物のモデルルートとして活用されたことも想定されるのである。

最後に、『竹斎』と『露殿物語』の仮名草子における位置付けについて考えておく。『竹斎』が万治年間の『東海道名所記』からその後のいわゆる「膝栗毛もの」の祖形となつていくことについては、既に多くの指摘がある。また、『露殿物語』が「評判記もの」の早い時期のものであり、特に六条三筋町の傾城町に関する数少ない貴重な記録であることも既に指摘されている通りである。しかし、この二作品のもつ意義はそれだけにとどまるものではなく、京都見物という観点からは名所案内記の祖形とも考えるべきという点を指摘しておきたい。

万治・寛文年間の『京童』や『洛陽名所集』に始まり、その後も刊行が続く名所案内記の出現は、当然ながら単なる読み物ではなく、京都見物における実用書としての要求に基づくものと考えられる。すなわち、京都見物に関する情報を必要とする人々が多く存在したと考えられるのである。これは万治・寛文年間以降に京都見物を行う人々が数多く存在していたことを示している。しかし、京都見物を行う人々は万治・寛文年間に新たに発生したわけではない。小論で取り上げた仮名草子の記述から、それ以前から京都見物が行われていたことは確認できる。万治以前に京都見物を行っていた人々も京都見物に関する情



報を必要としていたであろう。そこに、京都見物に関する情報源としての仮名草子が想定できるのである。従って、仮名草子に表現された京都見物が、『京童』をはじめとする万治・寛文年間以降の名所案内記類に影響を与えたと考えることができるのである。

〔注〕

- (1) 新城常三『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』(塙書房、一九八二年) 六九九～七二二頁
- (2) 林屋辰三郎編『近世の展開』(京都の歴史五、学芸書林、一九七二年) 二八九～二九一頁
- (3) 岸得蔵「解説 仮名草子」(『仮名草子集 浮世草子集』日本古典文学全集三七、小学館、一九七一年) 七頁
- (4) 青木美智男『日本文化の原型』(全集日本の歴史別巻、小学館、二〇〇九年) 一五三頁
- (5) 鈴木棠三「慶長見聞集 解題」(原田伴彦・竹内利美・平山敏治郎編『日本庶民生活史料集成』第八巻見聞記、三二書房、一九六九年) 四七二頁
- (6) 神保五彌、青山忠一、岸得蔵、谷脇理史、長谷川強校注・訳『仮名草子集 浮世草子集』(日本古典文学全集三七、小学館、一九七一年)「解説」二〇～二三頁
- (7) 暉峻康隆「仮名草子」(『岩波講座日本文学史』第七巻、岩波書店) 一九五八年
- (8) 前掲注(6)
- (9) 前掲注(6)
- (10) 『京羽二重』(野間光辰編『新修京都叢書』第二巻、臨川書店、一九九三年) 二四頁
- (11) 京都町触研究会編『京都町触集成』別巻一、岩波書店、一九八八年、七二五頁

〔参考文献〕

- 鎌田道隆『近世京都の都市と民衆』思文閣出版、二〇〇〇年  
 川嶋將生『洛中洛外』の社会史』思文閣出版、一九九九年  
 暉峻康隆「仮名草子」(『岩波講座日本文学史』第七巻、岩波書店、一九五八年)  
 中村幸彦『中村幸彦著述集』第四巻、中央公論社、一九八七年  
 野田壽雄校注『仮名草子集』上(日本古典全書)、朝日新聞社、一九六〇年  
 花田富二夫、入口敦志、中島次郎、安原眞琴、ラウラ・モレッティ編『假名草子集成』第四十八巻(東京堂出版、二〇一二年)  
 原淳一郎『近世社参詣の研究』思文閣出版、二〇〇七年

(なかじま しんご) 文学研究科日本史学専攻修士課程修了)

(指導教員・渡邊 秀一 教授)

二〇一三年九月三十日受理